

Title	ソクラテック・ディレンマ・トレーニング
Author(s)	中岡, 成文
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 25-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11889">https://hdl.handle.net/11094/11889</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ソクラテック “ディレンマ・トレーニング”

中岡成文

ディレンマ・トレーニングのワークショップは2001年9月9日、待兼山会館会議室で行われた。ファシリテーターのホルスト・グロンケ氏が日本語を話せないため、基本言語は英語としたが、ごく一部便宜上日本語を使用した場合もある。

グロンケ氏によれば、ディレンマ・トレーニング（以下DT）はオランダで始められ、グロンケ氏周辺で改良された。DTは日常的事柄、つまり葛藤があるのに絶対の解決法が見出せない状況で役立ち、管理者、ビジネス、医療の世界で用いら

れている。DTはきちんとした手順つまり構造をもつので有効とされる。ソクラテック・ダイアログ（SD）との違いは、SDでは分析のあとすぐに決定がされるのに対し、DTではまず論拠を求め、そこから決定に至るところにある。

ディレンマを語る第1段階に入った。本日のテーマ「私は（依頼に対して）いつノーと言うか」に関して、参加者各自が自分の直面したディレンマを短い文章やキーワードにまとめた。参考のためにグロンケ氏は、「ある女性からSDを手伝いたいと申し出を受けたが、彼女は有能でなかったので、私ははっきりとノーとは言わなかったものの、それを避けるようにした」という事例を持ち出した。これを受けて参加者が一人ずつ自分の

ディレンマを語ったあと、どの例が最適と考えるかについて、まず3人ずつの組に分かれ、次に全体で話し合った。自分の推薦する例の長所（「プロ」、たとえば一般性がある）、反対する例の短所（「コン」、たとえば本当のディレンマではなく逃げ道がある）を指摘しあい、その過程で自分の推薦例を変更することも許された。最終的に選ばれた例は、「大学で1年生相手に哲学を教えているが、あるとき再履修の学生（4年生か5年生）が来て、もし落ちたら卒業できないので通してくれと頼んだ」というものだった。

昼食後セッションが再開され、選ばれた例が詳述された。今回のDTは英語で行われたが、この詳述（と他のいくつかの発言）は日本語で行われ、他の参加者も協力して大意を英語でファシリテーターに伝えた。その学生は何を頼んでいるのか、あなたはその状況で何を考えたか、あなたは学生にどう言ったか、結局どんなディレンマがあるのか、その依頼にイエスと答えたほうがよい理由、逆にノーと答えたほうがよい理由などについて、事例提供者だけではなく、他の参加者もいろいろ意見を出し合った。グロンケ氏が用意した資料の問い（たとえば「誰が決定に関与しているか、あるいは関与する可能性があったか」）に各自が答えていった。グロンケ氏は、事例提供者は

その学生に、「では二人で相談してみよう」と提案し、対話することで、学生本人を決定プロセスに引き入れることができたはずだと指摘し、この指摘は短いが自分としては「分析」のつもりであると付け加えた。

最後に各自の結論、つまり「事例提供者にアドバイスするとすればどう言うか」についてまとめた。あるアドバイスを英語のまま紹介すると、Make sure the student is sincere and tell him to attend

as many classes as possible. If he is good enough, give him the credit. というものだった。それを受けて事例提供者が自分の結論を出したが、その結論に対して「いまあなたはどう感じるfeelか」とファシリテーターは他の参加者に問うた。いよいよの最後に、DTについてどう思うか、役に立ったかとグロンケ氏は質問し、それほどhelpfulではなかったという厳しい意見と、よかったという意見とが出された。

(なかおかなりふみ)

## SD " What is a good teaching? "

経過と、遡及的抽象、進行方法の検討

会沢久仁子

ベアーテ・リティヒをファシリテーターに迎え、" What is a good teaching? "(「よい教授とは何か?」)というテーマで、2日間のソクラティック・ダイアログ(以下、SD)を行った。その経過を段階に分けて報告するとともに、今回のSDの特徴として「遡及的抽象」を挙げ、その実際上の制約と、制約に応じたSDの進行方法とを考えたい。

### 経過

0. 自己紹介 参加者は、臨床哲学研究室の大学院生と卒業生に、オーストラリア人留学生と日本在住アメリカ人の計

8名であった。ベアーテの指示で、これまでのSDの経験と、今回のテーマである教授経験の有無、今回の参加にあたっての関心を各自述べ、自己紹介をした。

1. 例を出す 第1セッションで、参加者は今回のテーマに関してそれぞれ自分の経験にもとづく例を出した。例にはその内容をすぐ思い出せるようなタイトルを付け、そのタイトルが前の模造紙に書き出された。参加者全員から、高校や大学、塾での諸科目の教授経験や、授業を受けた経験、外国語習得の経験などの例が出された。

2. 例を選ぶ 休憩後、第2セッションで、例を一つ選んだ。ベアーテが示した、よい例の4つの基準(シンプル、参